

Ernest Hemingway 研究

— 作品における主人公の描き方 —

三 留 修

(序)

Ernest Hemingway の文学に関して、敗北の文学、非情の文学、不安・絶望の文学等、これまでにいろいろいわれてきたが、ここでは Hemingway の作品の中に出てくる主人公を通して「闘い」について論じてみたいと思う。

Philip Young は、*The Old Man and the Sea* について述べているところで、

Although the view of life in this novel had a long evolution from the days of total despair, it represents nonetheless an extraordinary change in its author. A reverence for life's struggle, and for mankind, seems to have descended on Hemingway like the gift of grace on the religious. The knowledge that a simple man is capable of the decency, dignity, and even heroism that Santiago possesses, and that his battle can be seen in heroic terms, is itself, technical considerations for the moment aside, perhaps the greatest victory that Hemingway has won. Very likely this is the sort of thing he had in mind when he remarked to someone, shortly after finishing the book, that he had got, finally, what he had been working for all of his life.^① (この小説の人生観は全くの絶望の時代から長い時を経て発展を遂げてきたものではあるが、この作家の並々ならぬ変化を表わしている。人生の闘いを尊敬し、人類を尊敬するという考えは、ちょうど宗教的な人たちに恩寵の賜物が下るように、ヘミングウェイの上に下ったもののようにみえる。単純な人間が人間らしさ、尊厳、またサンチャゴのような崇高さをすら持ち得るという考え、そして人間の闘いを崇高だと見ることができるという考えは、技法上の考慮は別として、それだけでヘミングウェイがこれまでに克ち得た最高の勝利であろう。彼は、この本を書き上げた直後に、自分は一生涯求めていたものを遂に得たと誰かに言った時、きっとこのことを考えていたに違いない。)

このようにいっているが、古今東西において、人間は、肉体的にも、精神的にも闘いの連続である。Young のいう闘いについて Hemingway は、彼の作品の中でどのように描いているか。Hemingway の作品の主人公は初期の作品から後期の作品になるにしたがって年令が上っていき、それぞれの主人公達は Hemingway 自身に非常によく似た人物に描かれている。ここにあげる作品も、作品そのものを論ずる場合には、それぞれ長所、短所と思われる点も数

々あるが、ここでは作品論にまで進めることはせずに、初期、中期、後期と大体の分け方で、主人公の生き方についてみていきたい。

(1)

Hemingway の初期の短篇小説の中に、Nick Adams という少年を主人公にして書かれた作品がいくつかある。Nick は感覚が鋭く、好奇心の強い少年で、すべてのことに対して最後までねばり、何ごとについても細かく観察するが、どうしてもなくなるとあっさりとおきらめてしまつてくよくよしない性格に描かれている。Nick は子供であるために自分自身で闘うというよりも、自分の眼で様々な闘いを見ながら成長していくのである。

Killers (1927) では、2人の殺し屋に狙われている元ボクサーの Ole Andreson に逃げてもらおうと、Nick は急を告げに行くが、Andreson は逃げてても無駄であることを知っている。アパートの自室のベッドに横たわり、壁を見つめたままである。Nick ははじめて暴力の世界を知り、Andreson の敗北と虚無の世界を知る。Nick は Andreson に逃げるように勧めたり、警察に知らせるかどうか Andreson に聞くが、彼は壁を見つめたまま動こうともしない。自分が殺されることを知りながら部屋にじっとしている Andreson のことを考えると、Nick はいたたまれなくなってその町から出て行こうと思うのである。

Indian Camp (1924) では、Nick は Indian の妊婦の出産の現場を見ることになる。Nick は、麻酔もせずに粗末な器具を用いて、彼の父親が行う帝王切開で、苦しみながらも元気な赤ん坊を産む女性の姿を一方で、怪我をして上のベッドで横になっている Indian の妊婦の夫が、妻の苦しみに耐えられなくなって、剃刀で咽喉を切って自殺している姿を見てしまう。苦しみながら新しい生命を産むために闘っている人間がいるのに、自分でその生命を断ち切ってしまう人間がいることを、Nick は自分の眼で見て、自分はどんなことがあっても自殺をしないと心に誓うのである。Nick にとってはこの自殺というものが、もっとも大きな関心事になったのである。

The Battler (1925) では、Nick は無賃乗車を見つげられて、走っている列車から外へ放り出されてしまう。Nick ははじめて自分が暴力的な行為をうけるが、この作品は喜劇的なストーリーの展開になっているので、Nick にとってはこの痛い一撃もむしろ貴重な体験になって、二度と同じような目には合わないにしようと思う。この一撃をくらうときに列車の制動手は、“Come here, kid, I got something for you.” Then wham and he hit on his hands and knees beside the track.^②（「こっちへ来いよ、坊や、いいものをやるよ。」すると、ガーンと一発くって、彼は線路脇に四つんばいになってしまった。）と言い、だまされたので、Nick は He had fallen for it. What a lousy kid thing to have done. They would never suck him in that way again.^③（あいつがひっかけたんだ。なんときたない子供だましの手を使うんだろう。もう二度とあんなふうにだまされたりしない。）と思うのである。このような体験を通して、肉体的に

も精神的にも Nick は成長していくことになる。

The Three-Day Blow (1924) では、嵐の日に Nick は、果樹園の上の丘の頂上にある、Bill の家をたずねて暖炉の前で一緒にウイスキーを飲み、文学を語り、Nick が味わった少女 Marjorie との別れのながい体験についての現在の心境を語り、あとでいいかげん酔っ払った二人は、Bill の父親を見つけて狩をするために森へ連れて行ってもらうのである。ここでは強烈な暴力の世界ではなくて、Nick の内面的なものが描かれ、また主人公のアルコールへのスタートとともに異性に対する恋心が描かれている。

Ten Indians (1927) では Nick は女の子 (Prudence) にふられたと思って泣きだしてしまうが、横になって、もの思いにふけているうちに彼女のことを忘れて眠ってしまう。Nick はちょっとしめっぽいところをみせる点はあるが、あっさりあきらめてしまうところはいかに Nickらしい。

Big Two-Hearted River I, II (1925) では、肉体的、精神的に傷ついた Nick がようやく回復して、希望にふくらんでいく姿が描かれている。第一部では釣りを一つの手段として、Nick は精神的に立ち直ろうとする。彼は自分で重い荷物を背負い、やっとの思いで目的の川のほとりにたどりつき、翌日の釣りにそなえて、テントの中で眠り十分に休養をとる。第二部では、Nick は朝テントの中で眼をさまし、疲れも完全にとれて、心身ともにすっきりとし、朝食の準備をしながらも、釣りのことを考えると、じっとしていられないような気持ちになる。Nick は餌にするバッタをとり、朝食もそこそこにして鱒釣りを始める。Nick はあらゆる注意をはらい、計算していながらも、テグスの張りが強すぎて切られたりするが、彼はかなりの大物を釣り上げて、得意顔をする。これは *The Old Man and the Sea* (1952) の老人にも通じるものがあるが、老人の方がやはりより巧妙である。こうして Nick は一時的にはあるが何もかも忘れて釣りに興じるのである。

Nick 少年が主人公として描かれている短篇から、ざっと Nick の行動について書いてきたが、彼は暴力の世界に出会っても、恋に破れても決して口では弱音をはかずに、鋭い観察力を持ち、あきらめるべきところではあっさりと身を引いてしまう少年として描かれている。

初期の他の作品の主人公もこの Nick 少年のように闘ったり、傷ついたり、あきらめたり、もがいたりしている時期である。Young は Nick 物語について次のように述べている。

By now it is perfectly clear what kind of boy, then man this Adams is. He is certainly not the simple primitive he is often mistaken for. He is honest, virile, but—clearest of all—very sensitive. He is an outdoor male, and he has a lot of nerve, but he is also very nervous. It is important to understand this Nick, for soon, under other names in other books, he is going to be known half the world over as the “Hemingway hero”: every single one of these men has had, or has had the exact equivalent of, Nick’s childhood, adolescence, and young

manhood.^④（ここに至ると、このアダムズという人物はどういう少年、それからまたどういう男であるかが完全にはっきりとする。彼はよく誤解されているような、単純で原始的な人物では決してない。彼は正直で男らしい。しかし最も明瞭なことは、彼は感受性に富んでいるということである。彼は屋外で活動する男性的な人物で、勇気がある。しかしまた非常に神経質である。この二点を理解することが大切である。というのは、彼は間もなく他の本の中で他の名前で「ヘミングウェイ的主人公」として世界の半分ぐらいに知られるようになるからである。これらの主人公たちは一人残らず、ニックの少年時代、思春期、青春時代を過してきたか、あるいは同等の経験を積んできたのである。）

つまり Nick Adams は外で活動する男性的な人間で、勇気があるが、神経も細かい。そして他の作品の主人公たちは、すべて Nick のような少年時代を送ったと思われる人物である、と Young は指摘しているわけである。

最初の長篇小説 *The Sun Also Rises* (1926) の Jake Barnes は第一次世界大戦で負傷して性的不能者になってしまう。女主人公の Brett Ashley の方は戦争で恋人を失い、一度は結婚するが、離婚し、また別の男と結婚しようとしている。しかし彼女はその男にも満足できずに Jake に引かれていく。しかし Jake は性的に不能なので二人は人生に絶望を感じ、その絶望から抜け出そうと、パリからスペインに旅し、釣りを楽しみ、闘牛を見物するが、それでも満足できず、二人はふたたびパリに戻るのである。Jake は何とかして希望の持てる人生を歩もうともがきながら、釣りや闘牛を楽しみ、酒を飲んだりするが、どんなことをしてもその瞬間しか彼は幸福を感じることができない。何をしても済んでしまうと彼には空しさしか残らない。そして傷ついた者同志の Jake と Brett は愛し合うようになるが、二人は最後には別れてしまう。Jake は暴力的な闘いはせずに、内面的にもがいている姿ばかりが描かれている。*The Sun Also Rises* は「初版は5090部だったが、非常な反響を呼んで、作者の名を一躍有名にした。強い共感を抱いた若い世代の中には、すすんでこの作品の世界に没入し、作中人物の生活をまねようとした者も多かった。」^⑤ということである。

A Farewell to Arms (1929) では第一次世界大戦に志願してイタリア戦線に参加し、傷病兵運搬車の指揮をとるアメリカ人の中尉である Frederic Henry は、同室のイタリア人の軍医 Rinaldi を通してイギリス人看護婦 Catherine Barkley と知り合う。軍隊生活でのたわむれの恋のつもりが、Henry が前線で足を負傷し、ミラノの野戦病院に送られた彼のもとに Catherine が転属されてきた時、真実の恋となった。手術後の回復期に Henry は Catherine と酒場や競馬場で夏を楽しむ。彼女は妊娠する。

秋になって、Henry が前線に復帰した時、戦況は悪化していた。雨の中の攻防の後、イタリア軍は総退却を始めた。徒歩で退却を続ける途中、彼は憲兵の訊問を逃れて脱走、戦場の義務を棄て去る。軍服を脱いだ Henry はストレーザの町で Catherine と再会する。しかし逮捕されるおそれがあるため、彼は Catherine を連れて夜中にマジョーレ湖をボートで渡り、スイスへ脱出する。そして幸福な冬を過ごしていた二人は、Catherine の出産にそなえて病院

のある町へ移る。しかし赤ん坊は死産で Catherine も出血多量で死ぬ。

この作品では Henry は戦場での闘いと、Catherine との愛の間で苦しみ、脱走したが、Henry は次のように感じる。

‘I wish we did not always have to live like criminals,’ I said.

‘Darling, don’t be that way. You haven’t lived like a criminal very long. And we’ll never like criminals. We’re going to have a fine time.’

‘I feel like a criminal. I’ve deserted from the army.’

‘Darling, please be sensible. It’s not deserting from the army. It’s only the Italian army.’

I laughed, ‘You’re a fine girl. Let’s get back into bed. I feel fine in bed.’⑥

(「僕たちは、いつも犯罪人みたいに暮さなくてもすむといいんだが。」とぼくはいった。

「ねえ、そんな風にはとらないで。あなたはそんなに長い間、犯罪人みたいに過ごしてきたわけではないでしょう。それにこれからも私たち、決して犯罪人みたいには過ぎないわ。私たち楽しく暮しましょう。」

「僕は犯罪人みたいな気がするよ。軍隊から脱走してしまったのだから。」

「ねえ、あまり気にしないで。そんなの軍隊から脱走したことにはならないわ。イタリアの軍隊にすぎないんだから。」

ぼくは笑った。「君は大したひとだ。さあ、ベッドにもどろう。ベッドの中にいれば気分はいいんだ。」

このようにどうしても Henry からは、脱走者としての犯罪者のような気持が抜けないのである。アメリカ人である Henry がイタリア軍に入隊しているのだからそれほど考え込む必要がないのでは、という Catherine の言葉に、Henry の心はなごむが、心中すっきりしたかどうかはわからない。上の会話の後で、

A little while later Catherine said, ‘You don’t feel like a criminal, do you?’

‘No,’ I said. ‘Not when I’m with you.’ ‘You’re such a silly boy,’ she said. ‘But I’ll look after you. Isn’t splendid, darling, that I don’t have any morning-sickness?’

‘It’s grand.’⑦

(それからしばらくすると、キャサリンはいった。「犯罪人みたいな気持はもうしないでしょう。」

「うん。」ぼくはいった。「君といっしょにいとしないよ。」

「あなたはほんとにお婆さんよ」と彼女はいった。「でも私があなたの世話をします。ねえ、私、朝の吐き気がしないなんてすてきじゃない。」

「それはいい。」

この会話からすると、Henry は犯罪者のような気持がなくなってしまったとみてよいと思う。精神的に苦しんでいる時に、Catherine のなぐさめの言葉を聞き、彼女の魅力にひかれていたとはいえ、Henry の気持の切りかえの早さはやはり彼に Nick Adams の面影が残っているのがわかる。

ここまで前期の代表作の主人公の中から、Nick Adams, Jake Barnes, Frederic Henry の3人の生き方を追ってきてみると、Nick という少年がいろいろな体験を通じて、自分の眼で見てきた世界で、成人した Jake や Henry が現実生きていくとき、希望の持てるような世界は無く、彼らは何とか現在の生活から逃れて、新しい、別の社会で幸福をつかもうとするが、安住の地を見つけない。彼らはもがいたり、逃れたり、戦ったりしながらも、精神的に満足感を抱くことができないばかりか、Henry のようにやっとの思いで手にした幸福もごくわずかな期間で、妻の死にあい、彼は病院をあとに雨の中を歩き、ホテルへ引き返さなければならなくなってしまうのである。

A Farewell to Arms 以後の作品の主人公も、一度は目的を達成し、幸福な気持を味わうが、幸福は長くは続かず、彼らは生命を失うか、手にしたものを失ってしまうのである。

谷口陸男氏はわざわざ「獲得と喪失」という項目をあげて次のように述べている。

「『日はまた昇る』のブレット・アシュレイは男から男へと渡り歩く長い肉体的遍歴の後に、ついに闘牛士ロメロとの真実の恋を獲得するが、最後にそれを喪失する。『武器よさらば』のフレデリックは恋人キャサリンとの愛情を完成するために行動し、ようやく獲得するが、恋人の死によって、手に入れたものを喪失する。そして小説の重要な部分は、彼が自分の目的をはたそうとする行動とそれを妨げる苛酷な環境との激突を描くことにささげられている。『持つと持たぬと』のハリィ・モーガンは彼と彼の家族の生活を保証する金を獲得しようとし、獲得したと思った瞬間、自分の生命を失うことによって、それを喪失する。『誰かために鐘は鳴る』の主人公は橋梁爆破の目的のために活躍し、その目的を果しえたが、自分の致命的な負傷によって十全の喜びを楽しむことができない。……『老人と海』の老人は大魚を獲得するが帰途鯨の群に襲われて、それを喪失してしまう。』^⑧ たしかにこの通りで、Hemingway の作品で、この小論にとり上げていない作品の中にも、「獲得と喪失」にあたるものがある。ただ、上の引用文の最初の部分、*The Sun Also Rises* の Brett Ashley に関する「獲得と喪失」は作品の主題からは少しはずれているのでこの項目に無理にあてはめた感じがする。主人公の Jake Barnes は得ようと思っても何も得られなかったのである。しかし Hemingway が登場人物の生き方を描くとき、「獲得と喪失」は彼のおきまりのパターンで、「獲得」するまでの主人公たちの闘う姿に読む方は引きこまれるのである。

(2)

Hemingway の中期の作品としては、長篇小説 *To Have and Have Not* (1937) と、*For Whom the Bell Tolls* (1940)、短篇小説 *The Short Happy Life of Francis Macomber* (1936)、*The Snows of Kilimanjaro* (1936) などが代表的な作品としてあげられるが、ここでは *To Have and Have Not* の主人公 Harry Morgan と *For Whom the Bell Tolls* の主人公 Robert Jordan を中心に述べてみたい。

To Have and Have Not は Hemingway の作品の中で、もっとも荒々しい暴力と無法の世界について描かれた作品であり、またもっとも多くの批判を受けた作品である。

Harry Morgan の持船を借り切って釣りをしていた男が、船賃や釣り道具の損料を払わずに逃げてしまったので、金に困った Morgan は12人の中国人を乗せてキューバから彼らを運び出す仕事を引き受けた。しかし Morgan は船で金を受け取ると同時に、この仕事をもってきた男を殺して海に沈め、12人の中国人をキューバの海岸へ追い帰してしまう。

次に Morgan は黒人と一緒に自分の船で酒の密輸の仕事をしたが、キューバ人に射たれて片腕を失い、船は押収されてしまった。それで Harry は酒場の主人の船を貸りて、多額の金を出すというキューバ人を、フロリダから連れ出す仕事を引き受けた。しかし船に乗り込んできたのは、銀行強盗をしてきた革命を夢みるキューバ人であった。彼等は Morgan の仲間の Albert Tracy を殺し、Morgan に銃を突きつけて船を出させた。Morgan はすきをみてキューバ人を皆殺しにしたが、自分も射たれて負傷する。メキシコ湾に漂っていた船が警備船に引かれてフロリダに戻った時、Harry は重傷を負ってほとんど意識不明に近かった。Morgan は病院で息をひきとる。

To Have and Have Not を書くまでの Hemingway は個人主義的な生の充実感を追求していたのに、この作品ではじめて社会参加への姿勢をみせたという肯定的な批評と、失敗作であると決めつけられる否定的な批評とに分かれた。無法の世界とか暴力の世界といっても、Hemingway の作品の中でこの作品ほど無謀な暴力について描かれたものは後にも先にもこれだけである。この作品論を述べる場合には、構成の複雑さ、意識の流れ風の独白を用いているとか、William Falkner の影響を受けているのではないかなど、Hemingway の転機を示しているのではないかとみられる点があるが、ここでは主人公の行動についてのみ述べる。しかしこの作品は登場人物が多く、複雑な構成をとっているためか、Harry Morgan は他の作品にみられるような魅力のある個性的な人物には描かれていない。Morgan は生活のためには手段を選ばないで平気で殺人を犯すような人物である。戦争以外で主人公が殺人を犯すのは、Hemingway の作品の中では Harry Morgan だけである。この小論では精神的、肉体的な闘いについて述べているが、初期の短篇に出てくる Nick Adams にはこのような無法者のような性格のかけらもみられない。強いてあげれば、Nick が出会った *The Killers* の殺し屋や *The Battlers* の中に出てくる男たちの中にならそのような無法者の性格をみることができるが、彼らは作品の中で主人公たちではない。ただこれまでの主人公と共通している点をさがすなら、やはりねばり強い点であろう。一人で多数の相手に闘い、相手のすきをみて撃ち殺すが自分も撃たれてしまう。そして死ぬ前に次のように言う。

‘Who did it, Harry?’ the mate asked. Harry looked at him.

‘Don’t fool yourself,’ he said. The captain and the mate both bent over him.

Now it was coming. ‘Like trying to pass cars on the top of hills. On that road

in Cuba. On any road. Anywhere. Just like that. I mean how things are. The way that they been going. For a while yes sure all right. May with luck. A man.' He stopped. The captain shook his head at the mate again. Harry Morgan looked at him flatly. The captain wet Harry's lips again. They made a bloody mark on the towel.

'A man.' Harry Morgan said, looking at them both. 'One man alone ain't got. No man alone now.' He stopped. 'No matter how a man alone ain't got no bloody chance.'

He shut his eyes. It had taken him a long time to get it out and it had taken him all of his life to learn it.^⑨ (イタリックは筆者)

(「ハリィ、だれにやられたんだ。」と航海士は聞いた。ハリィは彼の方をみた。

「ばかなまねはよせよ。」ハリィは言った。船長と航海士は二人とも彼に身を乗り出すようにした。さあ、言うぞ。「山のでっぺんで自動車を追い抜こうとしているようなものだ。キューバのあの道で。どの道でも。どこででも。どんな事情であるかをいってるんだ。よくあるやり方さ。しばらくは、うん、大丈夫さ。運でもよくなれば。でも一人では。」ハリィは黙った。船長は航海士に向ってまた首を振った。ハリィ・モーガンは生氣なく船長を見た。船長はハリィの唇をしめした。タオルに血の跡がついた。

「一人では」ハリィ・モーガンは両方の顔を見ながら言った。「一人ぼっちではだめだ。もう一人ぼっちでは。」彼は黙った。「一人ではどんなにしてもこんなひどいときに勝ち目はない。」彼は目をとじた。それを見つけ出すには長い間かかったし、それを悟るには彼の全生命が必要だったのだ。)

Harry Morgan は一人で闘うのではどうしても勝ち目はないということを悟る。そこに Hemingway は社会に参加する意識に目ざめたという見方がなされるのであろうが、それが必ずしも Hemingway の作品において成功しているとはいえない。Morgan の無茶な闘いを通して、上の反省とも後悔ともつかない気持が描かれているが、自分の力を最高に信じ、自分の行動に自信をもって生きる人間の姿を描くとき、勝っても負けても、つまづいても、Hemingway の作品は Hemingway らしさを発揮するのである。To Have and Have Not においても、Morgan 個人の動き、彼の考え方のみを追うと、やはり Hemingway 的な主人公であるのに、作品全体をみると様々の問題が出てくる。

For Whom the Bell Tolls はわずか三、四日の間の短い期間の出来事である。スペインの内乱にあたり、民主主義防衛のために政府軍を援助しようとかけつけたアメリカの一青年 Robert Jordan の物語である。Jordan は道案内の老人と、政府軍の命令によって敵の援軍の通過をさまたげるために、政府軍の攻撃開始の直後に敵の背後にかかっている鉄橋を爆破しようと、ダイナマイトの包みをつぎ、闇にまぎれて敵中を突破してきたのである。この山中には政府軍に忠誠を誓ったゲリラ隊が何組か住んでいた。その中の Pablo という指導者に Jordan は

会う。Pablo 以下 7 名のゲリラ隊の中には 19 才の Maria という美人もいた。Jordan は Pablo 達の力を借りながら鉄橋爆破の準備にかかる一方、Maria と短い間の激しい恋に陥いる。Jordan は心から Maria と結婚したいと思い、この戦いに勝たなければ共和国も何もかもすべてが終りになってしまうのでどうしても鉄橋爆破を成功させたいと願う。鉄橋爆破に成功した Jordan は、Pablo たちと打ち合わせていた所で落ち合い、馬に乗って逃げようとするが、彼の馬が敵弾をくらい、馬の下敷きになって左脚をひどく挫いてしまう。追手が迫ってきたが、Maria はその場に残って Jordan の手当てをしようと言うが、彼はそれを受け入れずに Maria を他の者たちと一緒にに行かせてしまう。

このようにあらすじを書くと、短期間の単純なものになってしまうが、*For Whom the Bell Tolls* は Hemingway の作品の中では最も長く、Jordan と Maria が愛し合うようになるまでの流れや、ゲリラが Jordan に協力してくれるまでの話、他のゲリラとの連絡、そのゲリラが敵の騎兵隊に襲撃される時の状態、Maria の過去の告白などが細かく描かれているのである。*For Whom the Bell Tolls* は定説通り思想的には *To Have and Have Not* の発展したものであると考えてよいと思うが、Jordan の生き方は Harry Morgan のそれとはまるでちがう。この Robert Jordan の生き方について Young は次のようにいっている。

Jordan has learned a lot, since the old days, about how to live and function with his wounds, and he behaves well. He dies, but he has done his job, and the manner of his dying convinced many readers of what his thinking had failed to do : that life is worth living and that there are causes worth dying for.^⑩ (ジョーダンは以前から、いかに生き、いかに傷つきながらも役目を果たすか、ということについて多くを学んできた。そして彼は立派に振る舞うのである。彼は死んでしまうが、自分の仕事を立派にやってのけた。人生は生きる価値があるもので、そこには命を賭けるに足る目的があるという彼の考えは、考えるに止るだけでは読者を納得させ得なかったが、彼は死を以てついに納得させたのであった。)

人生は生きる価値があり、そこには生命をかけてまでもする目的がある、というこの Young の言はたしかにその通りであろうが、あまりにも Jordan が理想的な人間の行動をしているように描かれている感じがなくてもいい。

中期の作品、*To Have and Have Not* と *For Whom the Bell Tolls* では、主人公は集団の中で闘っている姿が描かれているのを指し、Hemingway は社会的な主題に手を出して失敗したのだという批判を受けている。これは作品について論及するとき、とくに *To Have and Have Not* についていわれている。しかしここでは主人公 Harry Morgan と Robert Jordan についてのみ述べることにする。先にも書いたように Morgan は生活のため、自分だけのためにやみくもに人殺しをしたという感じが強いのに、Jordan の方ははっきりとした目的と理由をもって、結果的には生命を落とすことになるが、自分に与えられた義務を遂行するためには、Pablo が鉄橋爆破命令の誤っている点に気づいたばかりでなく、Jordan も気がついてい

るのだが、引き返すことができず、また行動する価値を認めると、彼は最後まで迷わずに行動するのである。

Jordan は *The Sun Also Rises* の Jake Barnes のように現実から逃れようとはせず、また *A Farewell to Arms* の Frederic Henry のように途中までは戦争に参加しながら脱走するようなこともなく、*To Have and Have Not* の Harry Morgan のように向こう見ずな闘いをすることなく、自分なりの確信をもって、勝つか負けるかわからない闘いにも、彼は勝利に向って全力をつくすのである。その結果 Jordan は自分の生命を落とすことになってしまう。彼は死ぬ間際に自分の行動に満足して次のように思う。

He looked down the hill slope again and he thought. I hate to leave it, is all. I hate to leave it very much and I hope I have done some good in it. I have tried to with what talent I had. *Have, You mean. All right, have.*

I have fought for what I believed in for a year now. If we win here we will win everywhere. The world is a fine place and worth the fighting for and I hate very much to leave it. And you had a lot of luck, he told himself, to have had such a good life. You've had just as good a life as grandfather's though not as long. You've had as good a life as any one because of these last days. You do not want to complain when you have been so lucky. I wish there was some way to pass on what I've learned, though. Christ, I was learning fast there at the end.^⑩

(彼はまた山の斜面を見おろして考えた。俺はこの世を去るのがいやなのだ。そのことだけだ。俺は本当にこの世を去りたくない。そして俺はこの世で何か良いことをなしとげたことを望む。俺は自分の持っていたすべての才能でためしてみたのだ。持っている、としてだ。そうだ持っているのだ。俺はこれで、一年間自分の信ずるもののために戦ってきた。もし我々がここで勝てれば、いたるところで勝てるだろう。この世界はすばらしいところであり、闘うに値いするところである。だからこの世を去るのはとてもいやだ。そしてお前は大変な幸運者だ、と自分に言ってきた。こんなにいい生涯をおくることになったのだから。お祖父さんの一生ほど長くはないけど、それにも負けないぐらい立派な一生を送ったことになる。この最後の数日のために、誰にも負けないぐらい立派な一生を送ったことになるのだ。そんなに幸運だったのだからお前は不平を言うつもりはないだろう。それにしても何とかして自分の学んだことを伝えたい。畜生、俺は死際になって急にそこで学んだのだ。)

Robert Jordan は死ぬ間際になって、自分の信じることのために闘ったこの世界は、闘うに値するところであり、自分の知り得たことを何とか後世に伝えたいと思う。しかしその時にはすでに Jordan の生命は焼えつきようとしているのである。Harry Morgan と Robert Jordan の二人は闘って生命を落とすことになってしまう。谷口陸男氏は、Jordan Robert について次のようにいっている。

「彼は冷静沉着果断であり、指揮能力に富み、命令には絶対忠実であって、恋愛のために自分の持場を放棄するとき行為は断じて行なわない。また自分もその一部を受け持っている攻撃作戦の全体が失敗するとわかっていても、中止命令がない限り、いかなる犠牲を払っても、それをやりとげる。フレデリック・ヘンリーの場合には分裂矛盾していた勇敢なる行為者とすぐれた戦士とが、ここではぴたりと一致していて、いわばジョーダンとはほとんど間然するところなき勇者だ。」^⑩

このように谷口氏は、途中で脱走した *A Farewell to Arms* の Frederic Henry のように迷いの気持を持たずに、Henry の成長した姿として Robert Jordan をみている。Hemingway の描く主人公は初期の作品からずっと一貫した、一人の人間の成長した姿としてみられるからである。

(3)

The Old Man and the Sea (1952) の主人公、老人 Santiago はメキシコ湾に小舟をうかべて漁をしている漁師で、一匹も釣れない日が84日も続いていた。40日目になると、この老人と一緒に小舟に乗っていた少年は、両親のいつつで別のボートに移ってしまった。老人に漁のすべてを教えてもらっていたこの少年は、老人がいつも空の小舟で帰ってくるのを見るのがとてもつらかった。少年は老人のためにえさを集めたり、食事の世話をしたりして老人をなぐさめるのであった。

85日目の朝、老人はたった一人で小舟をどんどん沖へ出した。そして自分の舟よりも2フィートも長い大魚をひっかけた。そして2昼夜にわたってこの大魚と闘う。だんだん疲れてきた老人は、少年がいてくれたら良いのに、何度も口に出して言う。老人はやっとのことで大魚を小舟にしばりつける。しかし帰る途中で何回もサメの襲撃にあって、老人は残った力をふりしぼってサメと闘うが、サメの数は非常に多く、大魚は食い荒されてしまう。そしてハバナの港に帰ったときには、せっかくものにした大魚は白い骨だけになってしまうのである。小屋では疲れ切った老人が眠っているそのそばでは少年がすわって老人の顔をじっと見守り、老人はライオンの夢を見ていた。

前期、中期の主人公たちの闘い方とちがって、この老人の闘いぶりは、釣った大魚に愛情を抱きながら、自分は漁師だから、友である魚を殺さなければならないのだと言う。これは先の *For Whom the Bell Tolls* の Robert Jordan にもいえることであって、Jordan は殺す相手が魚ではなくて、人間であり、鉄橋であるが、彼は戦争なのだから人間を殺しても、鉄橋を爆破しても仕方がない考える。自分の進むべきだと決めた、あるいは決められた道に対しては、あまり迷わずに進んでいくのが Hemingway の描き出す主人公たちの生き方である。老人の84日間というものあきらめずに出漁するねばりはこれまでの主人公の老成した姿である。老人は生れながらの漁師であり、魚がすぐに浮かび上ってこないとわかった、がっかりすると

ころか、どっちかが死ぬまで付き合ってやると思い、人間の偉大さをみせつけてやると彼は張り切るのである。

‘I will kill him though,’ he said. ‘In all his greatness and his glory.’

Although it is unjust, he thought. But I will show him what a man can do and what a man endures.

‘I told the boy I was a strange old man,’ he said. ‘Now is when I must prove it.’

The thousand times that he had proved it again. Each time was a new time and he never thought about the past when he was doing it.^⑧

「でも俺はあいつを殺してやる。」と彼はいった。「どんなに立派なやつだって、どんなにすばらしいやつだってな。」

それは正しいことではないが、と彼は思った。しかし俺は人間がどんなことをやれるか、人間が何を耐えるのかをあいつにみせつけてやる。

「俺は一風変わった年寄りなんだ、とあの子に言ったことがあった。」と老人はいった。「今こそそれを証明しなければならない時だ。」

彼がそれを証明してきたのは数しれない。機会はそのたびごとに新しい。彼がしてきた過去のことなど考えもしなかった。）

老人はこのように人間がどれだけの力をもっているかを魚に見せつけてやろうと思い、心構えとしては過去の誇りある体験などは捨てて、新しい気持ちで目の前の出来事にあたろうとする。老人は年をとってもねばりをもって人間の力の限界まで闘うつもりでいる。老人の手指がひきつり自由がきかなくなると、鰯の切り身を食べて少しでも力をつけながら彼は長期戦に備えるが、手のひきつりが直りかけると、こんどは意識の方がだんだんあやしくなってくるのである。このような苦しみの末に大魚を手に入れることができたのに、次から次へと現われるサメの襲撃で、老人にはしとめた大魚を守り切れる希望がないにもかかわらず、被害を最小限にくいとめる努力をするが、サメに魚の肉をすっかり食いとられると、老人ははじめて諦めの境地に達する。Hemingwayは、何かを成しとげた結果よりも、成しとげようとしている過程を重視し、老人が大魚をしとめてその巨体を小舟の横腹にくくりつけたところで、老人の行動を評価していると思われる。

老人は日常は海に出て、魚を追い、陸上ではコーヒーを好み、野球の話をするのを楽しみとし、少年を友として生活している。老人の頭にはもうすでに迷いも、不安もなく、彼はただ漁に出るのだけが天職だと信じて海へ出ていくのである。そして *The Old Man and the Sea* 以前の主人公たちは、ほとんどが過去をふりかえるようなことはなかったのに、老人はしばしば過去の自分の姿、妻のこと、ライオン狩りをしたこと、趣味のことなどを想い出しては昔をなつかしむ。

ここまでずっと主人公の生き方、闘いについて述べてきたが、Hemingway の作品には必ず主人公を愛する女性が登場する。谷口氏は「ヘミングウェイの小説の女主人公がすべて美女ぞろいであることは、作品を読んだ者ならすぐわかることでいまさら書くほどのこともないくらいだ。そしてそれが彼の小説の魅力の一つになっていることも疑う余地がない。」^⑩と指摘しているが、これらの美しい女性たちと、主人公は恋をする。*Ten Indians* で Nick は Pruden にふられたと思い涙する、ということはすでに上に書いたが、Hemingway は、主人公と女性との恋が、いずれも短い期間で幸福は崩れるというパターンで描いている。*The Sun Also Rises* の Jake Barnes は Brett Ashley と結ばれぬままに別れる。Brett はそれほど愛情を感じぬままに男に肉体を投げ出す女性である。彼女は結婚に失敗し、再婚者を見つけたのに Jake Barnes に好意をもち、あげくのあてには若いハンサムな闘牛士と本当の恋に入っていくが、闘牛士を破滅させることを恐れて身をひく。傷ついた Jake Barnes と Brett Ashley は情は通じていたものの結局は離れていく。この作品では二人はどうしても結ばれずに別れなければならない苦しみが描かれている。*A Farewell to Arms* の Frederic Henry と Catherine Barkley の恋は、彼の負傷や、前線出兵、脱走などのいくつかの危機をのり越えてついに幸福を手に入れるが、出産の失敗によって彼女の生命は奪われてしまう。*To Have and Have Not* の場合は Harry Morgan と妻 Maria との恋は、作品の中で大きな位置をしめていないので、この点でも Hemingway らしくない作品だといえる。*For Whom the Bell Tolls* の Robert Jordan と Maria は、鉄橋爆破の準備中という異常な空気の中で熱烈な恋愛に発展していく。Maria はもとは市長の娘であったが、ファシストに両親を殺害され、彼女は暴行を受けたあげくに頭髪を刈りとられてしまった。この二人の恋も Jordan が重傷を負って、幸福を夢んでいた Maria に別れをつける。*The Old Man and the Sea* になると、女性としては老人の妻が、彼の思い出の中にしか出てこないのも、実際の女性との恋は描かれていないが、その代りのように少年が登場している。老人が少しでも困ったり、身体の調子が悪くなったりすると、彼の頭にうかぶのは少年のことである。大魚との長時間の格闘で手の指がひきつって自由がきかなくなってくると次のような言葉がでてくるのである。‘I wish I had the boy,’ the old man said aloud... (p.45), Then he said aloud, ‘I wish I had the boy. To help me and to see this.’ (p.48), ‘I wish the boy was here,’ he said aloud... (p.50) Aloud he said, ‘I wish I had the boy.’ But you haven’t got the boy, he thought. You have only yourself and you had better work back to the last line now in the dark or not in the dark, and cut it away and hook up the two reserve coils. (p.52 大声で彼は叫んだ。「あの子がついていてくれたらなあ」しかし、今はお前には少年はついていない、と彼は思った。お前にはお前しかいない、だから暗くても暗くなくても、今は最後の綱をひく仕事にもどった方がいい。その綱を切って控えの綱を留めてつないだ方がいい。), If the boy were here he could rub it for me and loosen it down from the forearm, he thought. But it will

loosen up. (p.62, もしあの子がここにいてくれたら、手をこすってひじから手首までもんでくれるのにと、彼は思った。でもそのうちにほぐれるだろう。), また上記の引用文⑬の中にも入っている, 'I told the boy I was a strange old man,' he said. 'Now is when I must prove it.' このように老人は少年に対する, というよりも, 恋人に対するような言葉を次から次へと出すのである。少年の方も老人のために釣りに使うえさをとってきてやったり, 食事の世話をしたり, 親の反対で老人と一緒に舟に乗れなくなったが, いつでも老人の側にいてやっている気持になり, 老人の方も少年の存在をいつも意識している。

この少年を老人の恋人とみるのには異論もあるかと思うが, ここでは一連の流れからみて恋人として扱うと, 初期の作品から後になるにつれて主人公の年令は次第に高くなっていくのに, 恋人または妻の方は *To Have and Have Not* の Marie (40才ぐらい) までは年令が高くなっていくが, *For Whom the Bell Tolls* の Maria は10代と思われるし, *The Old Man and the Sea* の少年と若くなってくる。以上, 主人公と恋の相手との結びつきもすべて幸福は長く続かない, という点では Hemingway の描き方は一致している。

Hemingway は主人公と恋人に関してはほとんど同じ描き方をしているし, 主人公の闘いに関しても Nick Adams から老人 Santiago まで, 一人の人間の少年時代から成人, 老人になるまでの成長過程を描いているように読める。作品はそれぞれ別個の作品として完成しているが, Hemingway は自分の体験を通してしか書かない作家であるから, 作品の舞台は世界中をまたにかけていても, 描いている世界は非常に狭いものであり, 物語の構成は彼の文体同様簡単明瞭なものである。またそれらの主人公は抽象的なものには興味を示さず, 現実の世界の中で何とかせい一杯生きるためにもがきながら, 何かを成しとげることを目的としている人物であり, *The Sun Also Rises* の Jake Barnes 以外は一度は目的を達成する。そして彼らは闘いに敗れても, 恋にやぶれてもじめじめしたところをみせない。彼らは外面的には非常に強くて, しかも細かい神経の持ち主で, 一人の力ではどうすることもできないのを知りながらも, 信念をもって立ち向かい, 生き抜き, その結果にはあまりこだわらずにむしろ満足さえる人間である。

この小論では, Hemingway の話題になった作品ばかりとり上げたが, その他の作品についてはまた別の機会に書いてみたい。

NOTE

- ① *Ernest Hemingway*; Philip Young, Minnesota Univ. 1963, pp.20-21. (訳文は「アメリカ文学作家シリーズ」第1巻, 北星堂書店, p.26から引用)
- ② *The First 49 Stories*, Ernest Hemingway, Jonathan Cape, 1962, p.111.
- ③ *ibid.* p.111.
- ④ *ibid.* p.7. (訳文は①に同じ)
- ⑤ 「*Hemingway*」20世紀英米文学案内, 研究社, p.103.
- ⑥ *Farewell to Arms*. Jonathan Cape, 1963. p.218.

Ernest Hemingway 研究

- ⑦ *ibid.* p. 218.
- ⑧ 「ヘミングウェイ研究」, 谷口陸男, 三笠書房, pp. 101-102.
- ⑨ *To Have and Have Not*. Penguin Books, pp. 177-178.
- ⑩ *ibid.* p. 17.
- ⑪ *For Whom the Bell Tolls*, Scribner, 1964, p. 467.
- ⑫ *ibid.* p. 85.
- ⑬ *The Old Man and the Sea*, Scribner, p. 66.
- ⑭ *ibid.* p. 71.